

# 新講源氏物語

他田 繭 經  
下 卷

新講源氏物語

下卷

池田  
龜鑑

昭和二十六年五月五日

印刷發行

新講源氏物語 下卷

定價金五百五十圓

著者

池田龜鑑

發行者

東京都新宿區拂方町二七  
佐藤正叟

印刷者

東京都中央區銀座西二ノ三  
小泉昭

行所

東京都新宿區拂方町二七  
至文堂

電話九段(33)二四一五番  
振替東京 二九五〇七七

# 目次

## 初

音

花のねぐら 明石の上物語一三・明石姫物語三

紅梅のほひ 末摘花物語七

尼ごろも 空蟬物語七

## 胡

蝶

縣想ふみ 玉鬘物語二

わか竹 玉鬘物語三

## ほ

たる

ほのめく光 玉鬘物語四

繪ものがたり 玉鬘物語五・紫の上物語一三

## 常

夏

和琴のしらべ 玉鬘物語六

目次

ひるね姿 雲井雁物語三……………三

舌の本性 近江の君物語一……………四

篝 火……………五

戀のけぶり 玉鬘物語七……………五

野 分……………五

霞の間のかば櫻 紫の上物語一四……………五

父の睦ごと 紫の上物語一五……………六

わすられぬ君 雲井雁物語四……………六

行 幸……………六

はじめて見る父 玉鬘物語八……………六

和解 玉鬘物語九……………六

なき人の面影 玉鬘物語一〇……………七

純 情 近江の君物語二……………七

藤 袴……………七

桂のかげ 玉鬘物語一 〇

とりどりの文 玉鬘物語二 八五

眞木柱 〇九

涙のみを 玉鬘物語一三 九二

發作 玉鬘物語一四・髭黒北方物語 九四

惜別 眞木柱物語 一〇三

庭の山吹 玉鬘物語一五 一〇五

思はぬ方へ 近江の君物語三 一〇八

梅枝 一一〇

水莖のあと 明石姫物語四 一二二

藤裏葉 一二八

花の旅寝 雲井雁物語五 一三〇

入内 紫の上物語一六・明石姫物語五・明石の上物語一四 一三七

一むらすすき 雲井雁物語六 一三〇

|   |   |         |    |
|---|---|---------|----|
| 行 | 幸 | 紫の上物語一七 | 一三 |
|---|---|---------|----|

|     |       |     |
|-----|-------|-----|
| 若菜上 | ..... | 一四〇 |
|-----|-------|-----|

|      |         |     |
|------|---------|-----|
| 玉の小櫛 | 秋好中宮物語三 | 一四〇 |
|------|---------|-----|

|    |   |         |     |
|----|---|---------|-----|
| 輿入 | れ | 女三の宮物語一 | 一四一 |
|----|---|---------|-----|

|     |                 |     |
|-----|-----------------|-----|
| 曉の雪 | 紫の上物語一八・女三の宮物語二 | 一四二 |
|-----|-----------------|-----|

|     |                 |     |
|-----|-----------------|-----|
| 父の愛 | 女三の宮物語三・紫の上物語一九 | 一五一 |
|-----|-----------------|-----|

|    |                  |     |
|----|------------------|-----|
| 復活 | 臘月夜尙侍物語六・紫の上物語二〇 | 一五二 |
|----|------------------|-----|

|        |         |     |
|--------|---------|-----|
| 老のくりごと | 明石女御物語六 | 一五七 |
|--------|---------|-----|

|      |                 |     |
|------|-----------------|-----|
| わかき母 | 明石女御物語七・紫の上物語二一 | 一六一 |
|------|-----------------|-----|

|      |         |     |
|------|---------|-----|
| 祖父の愛 | 明石女御物語八 | 一六三 |
|------|---------|-----|

|    |         |     |
|----|---------|-----|
| 蹴鞠 | 女三の宮物語四 | 一六四 |
|----|---------|-----|

|     |       |     |
|-----|-------|-----|
| 若菜下 | ..... | 一六八 |
|-----|-------|-----|

|   |         |     |
|---|---------|-----|
| 猫 | 女三の宮物語五 | 一八二 |
|---|---------|-----|

|       |                  |       |
|-------|------------------|-------|
| 灯に映ゆる | 紫の上物語二二・明石の上物語一五 | ..... |
|-------|------------------|-------|

女三の宮物語六・明石女御物語九……………一八五

のがれぬ宿世……………女三の宮物語七……………一八六

はちすの露……………紫の上物語二三……………一八七

ひぐらしの聲……………女三の宮物語八……………一八八

眞……………情……………女三の宮物語九……………二〇一

空……………醉……………ひ……………女三の宮物語一〇……………二〇五

## 柏木

愛……………憎……………女三の宮物語一一……………二一五

結……………縁……………女三の宮物語一二……………二一七

最後の對面……………女三の宮物語一三……………二二三

## 横笛

尼宮の住ひ……………女三の宮物語一四……………二二九

かたみの笛……………落葉の宮物語一……………二三三

執……………心……………落葉の宮物語二・雲井雁物語七……………二三七

日  
次

鈴 虫

十五 夜 女三の宮物語一五

夕 霧

秋の小野 落葉の宮物語三

いさかひ 雲井雁物語八

御 法

萩のうは露 紫の上物語二四・明石中宮物語七

死者の顔 紫の上物語二五

幻

春 寂 寥 紫の上物語二六

道 心 紫の上物語二七・女三の宮物語一六

水 莖 紫の上物語二八

御 佛 名 紫の上物語二九

雲 隠

二八九

句

宮

いどみ心 句宮物語一・薫君物語一

二九四

紅

梅

二九八

花の一枝 句宮物語二

二九九

竹

河

三〇三

男 踏歌

三〇六

橋

姫

三〇〇

有明の月 大君物語一・中の君物語一

三〇四

父の秘密 女三の宮物語一七

三〇六

椎

本

三〇二

遺言 大君物語二・中の君物語二

三〇五

總

角

三八

墨染の火影 大君物語三

三〇四

桂すがた 大君物語四

三〇八

目次

香の煙 中の君物語三……………三〇

病の床 大君物語五……………三四

髪の香 大君物語六……………三四

雪の山 大君物語七……………三七

早蕨……………三九

春の光 中の君物語四……………三五

宿木……………三六

煩悶 中の君物語五……………三六

秋の夕ぐれ 中の君物語六……………三九

疑心 中の君物語七……………四〇

かいまみ 浮舟物語一……………三七

東屋……………三八

常陸殿 浮舟物語二……………三八

燈籠の火 浮舟物語三……………三七

宵の雨……………浮舟物語四……………三九一

浮舟…………………………三九三

宵居……………浮舟物語五……………四〇三

暗き灯かげ……………浮舟物語六……………四〇四

橘の小島……………浮舟物語七……………四〇六

不信心……………浮舟物語八……………四〇九

犬の聲……………浮舟物語九……………四二二

死への道……………浮舟物語一〇……………四二五

蜻蛉…………………………四二三

紅の袴……………女一の宮物語一……………四二九

繪物語……………女一の宮物語二……………四三三

手習…………………………四三六

魔性のもの……………浮舟物語一一……………四三七

私たちのまかげ……………浮舟物語一二……………四五三

目次

一〇

夢

落

浮

橋

飾

浮舟物語一三

四六

前驅

の

聲

浮舟物語一四

四六

求

道

浮舟物語一五

四九

源氏物語評釋 下



## 初 音

この巻には、源氏三十六歳正月の事がかかれてゐる。以下行幸の巻の前半まで、すべて三十六歳のことである。主要人物は、紫の上(二十八) 明石の上(二十七) 明石姫(八)で、そのほか玉鬘(二十二) 花散里、空蟬、末摘花、夕霧(一五) などがある。

年たちかへる六條院の朝は、うららかであつた。朝の年賀のにぎははしきは、先づ六條院の女王の紫の上の住ひに見られた。夕方もの静かな頃に、源氏は院内の町々の女たちを訪ねた。先づ明石の姫君を訪ふと、實母の明石の上からとて、髭籠などが、五葉の松の枝につけて贈られてゐたが、それには、

年月をまつにひかれてゐる人にけふ鶯の初音きかせよ

との歌が添へてあつた。源氏は、あはれ深くそれを見て、みづから硯をとりよせ、姫君の手をとるやうにして、返事をかかせた。それから、花散里や玉鬘を訪うたが、去年の暮れ、晴着として一人一人におくつた縹色や山吹色などは、けふは、それぞれの女たちによく似合つてゐた。

夕暮れ時、明石の上をたづねた。すさび散らした文反故の中に、姫君をおもふ心の切な歌などが見られて、源氏はふかく心うたれた。この間おくつた晴着の白い浮紋がよく似合ひ、さすがにきは立つて立派だ、と源氏には思はれた。新年早々、紫の上の嫉妬は氣になつたが、やはりその夜はそこで泊つた。

二日の臨時客もすんで、すこしもの静かになつたころ、二條院に行き、そこで末摘花や空蟬の尼君にあつた。末摘花は相變らずの几帳面だし、尼君は靜かな信仰生活にはいつてゐた。

今年は男踏歌があり、朱雀院からこの院へ廻つてきた。女房たちにとつては、それは楽しい見ものであつた。その時、玉鬘ははじめて明石姫に對面した。

## 花のねぐら 明石の上物語 一三・明石姫物語 三

源氏は明石姫の部屋をたづねて、明石の上からとどけられた歌をみた。その歌にこめられた母親らしい心は深く彼の心をうつた。足かけ五年、最愛のものを人の手にわたし、今は同じ邸内にゐながらも、一目すらあふことのできないこの母のかなしみを、しみじみと思ひやることのできる源氏であつた。薄雲の卷にひきつづくこの明石の上の母性愛こそは、おそらくこの物語の作者における好箇の題材であつたであらう。

- (一) じつとしてゐられない程樂しさうだ。
- (二) 姫君の母明石上から。
- (三) わざわざ苦心して集めたい。
- (四) 細く削つた竹で編んだ籠。編み残しの端が尻の襟に見える故の稱。
- (五) 櫓の木で中に仕切のある食器。
- (六) 何ともいへぬよい形の五葉松の枝につけた作り物の鶯も無心には見えない。
- (七) 小松のやうな姫君の成長を榮しんで年月を待ち通した私に、今日こそ鶯の初音のやうな便りを聞かせて下さい。

姫君の御方に渡り給へれば、童下仕など、御前の山の小松ひき遊ぶ。若き人の心地ども、<sup>一</sup>おき所なくみゆ。<sup>二</sup>北のおとどより、<sup>三</sup>わざとがましくし集めたる<sup>四</sup>髭籠ども、<sup>五</sup>破子<sup>五わりこ</sup>など奉れ給へり。<sup>六</sup>えならぬ<sup>七</sup>五葉<sup>ごあふ</sup>の枝に、うつる<sup>ちぐひす</sup>鶯も、思ふ心あらむかし。

明石<sup>七</sup>一年月をまつにひかれて經る人にけふうぐひすの初音きかせよ